

## 監督一代 < 部活動と私 > 山崎 純男 朝日新聞 1985/01/09(水)

バスケットボールの監督生活が19年を過ぎようとしている。しかも、私と部活動とのかかわりは教師としての義務感や趣味の域を超え、私の生活のすべてと言っても過言ではないほどとりつかれてしまっている。

バスケットボールが好きだから続けているのではない。勝利の喜びが忘れられないから続けているのではない。コートの中の選手の真剣な目、それがすばらしいと思うから続けているのである。バスケットボールはひとつの媒体であって、それが絵であれ書であれ音楽であれ私にとってはどれも同じだ。全力を尽くして自分の可能性に挑戦している若者の姿、世の中でこれほど美しいものはない。

丸いボールを他の選手より少しうまく扱えるようになったからといって、それが自分の将来にどれだけ役に立つのかはわからない。それでも敢えて選手たちは辛い訓練に耐え、少しでもうまくなるうとして毎日汗みどろになって練習する。そんな若者を見るとたまらない感動を覚え、手を差し伸べてやりたい衝動にかられるのである。

部活動...そこでは教師と生徒、上級生と下級生、すべてが隔たりを取り除き互いに自分をさらけ出すことができる。部活動とともに歩んだ19年。私はそこに教育の原点を見たような気がする。

## 監督一代 < しつけ > 山崎 純男 朝日新聞 1985/01/23(水)

指導者であれば誰もが強いチームを創りたいと願う。そのためには他のチームより厳しい練習をしなければならぬ。しかし私は、それよりも練習以前の基本的なしつけをもっと大切にする。選手である前に立派な生徒であることを求めるのである。立派な生徒とは、学習成績の優れた生徒ではない。基本的な生活習慣が身についた生徒である。

基本的な生活習慣、それは「おはようございます」「おやすみなさい」のあいさつができること、食事は好き嫌いをせず食べ残さないこと、部屋の出入りの際は履物をそろえること、などである。それも、監督の前に居る時や合宿や遠征の時だけしか実行しないのではダメだ。日常生活の中で習慣にならなければならない。なぜなら、双方死力を尽くして戦う試合は、技術や体力の差で勝負が決まることよりも、人間性の差で決まることの方が多いからである。

しつけをするには根気がいる。私が注意することの意味や大切さがわかるようになるのは早い、なかなか実行できるようにはならない。この「わかるけれどもなかなか実行できない」のが人間の愚かさで、例えばバス停には備え付けの吸い殻用空きカンが備えてあるのに道端にポイと吸い殻を投げ捨てるおとなたち、彼等はみな「捨ててはいけない」と知っているはずだがそれを実行しない。

「話しを聞くときは相手の目をしっかり見ておけ」「返事は大きくはっきりと」「ボールはていねいに扱え」こんなわかりきったことを毎日毎日根気強く指導する。それがめんどくさくなったら指導者としてやっていくことはできない。その、めんどくささをがまんして根気よくしつけを続けていけば、半年も過ぎると新入生の顔から幼稚さが消える。それからようやく本格的な技術指導が始まるのだが、他人の話をよく聴く耳と物事を注意深く見る目を育てられた選手たちが上達するのは早い。

## 監督一代 < マネジャー > 山崎 純男 朝日新聞 1985/01/30(水)

私のチームには現在4人のマネジャーがいる。3年生がひとり、2年生がひとり、見習い中の1年生がふたりだ。一般的にマネジャーというのは雑用係だという印象が強いが私の場合は違う。私の重要なスタッフである。会社組織でいえば私とマネジャーは経営者であり、選手たちは社員である。

マネジャーの仕事をざっとあげてみる。

- 1 試合や練習のデータ整理
- 2 選手のコンディション(ケガ・病気・体重変化等)の把握
- 3 備品、消耗品の管理
- 4 経理一切
- 5 日常の練習の指揮

まだまだあるが、これに遠征や合宿が加わると目が回るように忙しくなる。だからマネジャーは最低3人は必要なのである。しかもこれだけの仕事をいちいち私の指示を受けて実行するのではない。自ら判断して処理する。私は報告を聞くだけである。これだけの仕事をするためには有能な人物でなければならない。選手として将来性がないからマネジャーに、というような安易な考え方でマネジャーになっても役に立たないのである。

マネジャーはスタッフだから服装も違う。選手より上等のパンツをはかせ、さっそうとしたジャンパーを着せる。選手と同じ練習用ジャージを着て忙しく走り回っていると、それこそ気分まで雑用係になりきってしまいそうだから上等の服を着せるのである。

私は最高指揮官だから、作戦や戦術に関しての研究を常に怠ることができない。若いコーチ陣から「先生はよくそんなに作戦や戦術のアイデアが次々と出てきますね」と、よく言われるがそれは有能なマネジャーに恵まれているからである。マネジャーが有能だと雑多なことに気を使わなくて済むから、私の脳細胞は練習のことに集中出来るのである。

間もなく、3年生が社会へ巣立つ日がやってくる。3年間、チームという組織を切り回した私のマネジャーはきっと第一級の社会人として今後も活躍してくれるだろう。そんな自信をもって私はマネジャーを毎年送り出す。

## 監督一代 < 思いやり > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 02 / 06 (水)

鶴鳴運動部寮には現在11人の選手がいる。対馬や五島・佐世保など、遠隔地の生徒ばかりである。寮の世話は私の母にやってもらっている。私も、試験中の勉強の手伝いや合宿等で時々泊まる。大晦日の夜も泊まった。寮に残っているのはバスケット部の1年生だけ5人(2年生と3年生は全員市内生だから自宅から通っている)。他の部活動の寮生はそれぞれ帰省して正月休みに入っている。バスケット部は元旦の午前中まで合宿し、それから正月休みなのである。コタツに入ってみなんと紅白歌合戦を見ていたら電話がかかってきた。リサが対応に出る。二言三言話して戻ってきた。

「誰から？」

「チエさんからです」

チエというのはバドミントン部の2年生である。二日前に佐世保へ帰った。

「で、何の用？」

「みんなどうしてるかなあとと思ってですって」

「用事はそれだけ？」

「ハイ」

「...」

私は胸に熱いものがこみ上げてきた。正月休み、春休み、夏休み、自宅に帰った寮生たちは家庭の温かさをむさぼるように味わう。チエも久しぶりに会った家族と語り合いながらくつろいでいたのだろう。こんな時、普通の生徒は自分の幸せをかみしめるのが精一杯で、とても他人のことを思う余裕はない。

チエは自分が味わっている満足感と比べて、寮に残っている1年生たちの心を思いやってくれた。「家族と別々に初めてすごす大晦日の夜、しかも1年生ばかりで...みんな何しているのだろう？」そんなやさしいチエの心づかいが私はうれしくてたまらなかった。

今年のチームは主力選手がほとんど1年生なのでなかなか強くない。少々焦りぎみの私は、選手が1年生であることを忘れて無理な注文とつけ、できなければのしるという日々が続いていた。チエの電話はそんな私に忘れかけていたやさしさを思い出させてくれた。ありがとうチエ。

## 監督一代 < 上下関係 > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 02 / 13 (水)

運動部における上級生と下級生の関係は、放置しておくとは封建的になりやすい。私は、上級生が下級生をズラッと並べて無意味な説教をしたり、廊下で上級生に会った時は直立不動で「コンチワー」とあいさつさせたりするのは大嫌いだ。そんなことで人間の上下関係のけじめがつかないものではない。

インターハイが行われるのは毎年8月上旬である。私のチームではこの大会に参加する時と終わって長崎に帰る時とでは車中の選手の座席配置がまったく違う。帰りの車中では3年生は末席に座り、私の周囲の座席は2年生と1年生が占める。新旧交代なのである。途中の駅でうどんを買う時は、1年生ではなく3年生

がサーッとホームに散る。

長崎に帰り着いた翌日からさっそく新チームの練習が始まるが、3年生の働きぶりは大変なものである。まだまだ未熟な下級生を手取り足取り指導する。練習ゲームの相手をする。雑用は決して下級生にはさせず、すべて3年生が引き受ける。引退したOB気取りでゆったりと構えている3年生は一人もいない。自分が主役であったつい先日までに勝るとも劣らない真剣な目つきで下級生の動きを追う。チームを愛する気持ち、後輩を愛する気持ちがそうさせるのである。それが卒業式の前日まで続く。

こうして育った下級生は自分が上級生になった時、同じようにして次の代の下級生を育てる。これは部活動なればこそできる人間関係であり、他のどの教育現場でも得ることのできない貴重な財産だと私は思う。

## 監督一代 < やめたい > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 02 / 20 (水)

厳しい練習を続けていると必ず一度は「やめたい」と思う時期が来る。それも、「勉強との両立が気になる」とか「たまには遊ぶ暇も欲しい」というような低いレベルのものではない。そんなことはすでに通り過ぎて、自分を追求し過ぎる故の「やめたい」なのである。

ピアノの修行、絵の修行、一度はピアノをたたきこわしたくなったり、カンバスを燃やしてしまいたくなったりした経験を持つ人が何人もいるだろう。ひとつのことに熱中しているともっと大切なことをやり残しているような気がして不安になったり、自分の才能に限界を感じてボールに触れることすら恐ろしくなったりするものである。現在全日本チームのキャプテンとして活躍している原田五月、昨年まで同じく全日本チームのキャプテンだった熊谷繁子、これほど偉大な選手たちでさえ高校時代に何度も「やめたい症候群」に襲われた。

選手がやめたいというと、まわりの人や家族はみな口をそろえたように「だれでも辛い思いをして強くなるのさ」と簡単に言う。それでもまだ辞めたいと言うと「先生の気持ちもわからずわがままばかり...」と叱る。わがままではない。辞めたいとは言ってもやらなければならないことはわかっているのである。ただ、神様が与えたあまりにも厳しい試練にどう対処したらよいかわからずに戸惑っているだけだ。やらなければならないことはわかっているから結局は、少し足踏みをするが彼女たちはまた練習を始める。こうした試練を何度も乗り越えて大きく成長していくのはわかっているが、選手が苦しむ姿を見ていると時々神様が嫌いになる。

## 監督一代 < 運動選手と病気 > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 02 / 27 (水)

「スポーツをしているおかげで病気をしない」ということばをよく聞く。しかし、このことばはスポーツと病気の間を誤解している。正確には「優秀な運動選手はなかなか病気をしない」と言わなければならない。運動をすれば筋力や持久力などの行動体力は身につく。だが、病気に対する抵抗力である防衛体力は運動で鍛えて獲得できるものではない。それは、正しい食事によるバランスのよい栄養摂取、十分な睡眠時間の確保など、規律正しい生活をすることによって維持できるものである。優秀な運動選手は、自己管理がしっかりしていて規律正しい生活をするから病気をすることが少ないのであって、運動選手といえども無茶な生活をするとう病気をするとケガもする。

私は5年ほど前、突然の腎出血で4ヶ月余り入院した。私を知る人は誰もが「え？あの人が入院？」と驚いた。まわりからはみな「あいつは病気とか疲労とは無縁なヤツさ」と思っていたし、私自身もそう思っていた。それぐらいタフだった。

工学用語に「疲労破断」というのがある。どこにも異常がなく動いていた機械が突然何の前触れもなく壊れて動かなくなることを言う。連続して使用することにより、外見からはわからない疲労が内部に蓄積し、それがある日突然出現して故障を起こすのである。私の場合も自分の体力への自信が過信につながり、それが疲労破断になったのではないかと思う。

「俺はスポーツで鍛えているから3日ぐらい徹夜しても平気だよ」という人は多い。確かにスポーツをしている人は一般人より体力があるかも知れないが、それは行動体力であって防衛体力ではない。それを誤解し、それを過信して無茶をすれば健康を害するし選手としての寿命も短くなるのである。そういう意味で、不休連続の出場記録を作り、なおかつ第一線で活躍している野球の衣笠選手や引退した大相撲の高見山関、私はこの人たちを本当に偉い人たちだと思う。

## 監督一代 < ケガ > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 03 / 06 (水)

県内の高校総体で常に上位にランクされているチームの選手にアンケート調査をした。その結果、半数以上がスポーツによるケガをした経験があり、3人に1人は今でも気になるケガや痛みを気にしながら練習していると答えた。

スポーツでのケガについては「多少のケガはつきものさ」という考え方があるがそれは間違いである。正しいトレーニングをしていたのに不可抗力でケガをしてしまったという場合もあるが、大半は誤った考え方のもとで無茶をしてケガをする場合が多い。

ケガをさせると、場合によっては優秀な素質を持った選手に将来をあきらめさせなければならないことがある。私は指導者になって6年目に、貧血の選手をそれとは知らずにハードトレーニングで鍛え続け、大切な試合を前に1ヶ月も練習を休ませなければならなくなった経験がある。それ以来、私は指導者としての責任を痛感し、スポーツ医学を勉強し続けてきた。おかげでスポーツ医学の知識が増えたばかりでなく、スポーツ活動に理解を示してくれる医師に巡り会うことができ、今では安心して練習に取り組めるようになった。

馬場薫里、彼女は久々の大器として将来を期待され、1982年の4月に鶴鳴女子高校に入学した。ところが彼女の高校3年間は入院とリハビリの繰り返しでほとんど練習らしい練習はできなかった。1年生の冬に右ひざを、2年生の秋に左ひざを傷め、2回とも手術をしたのである。

通常、高校時代に2回も膝の手術をすればその後の選手生活を断念する例が多い。が、彼女は来月から日本リーグ2部の三菱重工でプレーを続ける。よい医師に恵まれ、焦らず根気よくリハビリを続けたおかげで経過がよかったからである。

高校でやっておくべきことを積み残したまま卒業するのだから三菱重工には迷惑をかけるがコツコツ努力を重ね、その素質を活かしてチームに貢献する選手になって欲しい。あとに続く後輩たちのためにも、一生懸命治療に当たってくれた二人の医師のためにも、そして自分自身「続けていてよかった」と言えるようになるためにも。

## 監督一代 < 手紙 > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 04 / 03 (水)

平井雄一郎、住所は東京の麻布。まったく心当たりのない人物から2月の初めに手紙が来た。こう書いてあった。「私は卒業を間近に控えた東京の一高校生です。(中略)中学からバスケットを始め、高校でもバスケットを続けました。手紙を書いた理由は、この夏自分の現役生活が終わったあとににあります。というのは、私は受験勉強の合間に母校の中学の指導を始めたのです。そして何ヶ月か経つうちに将来はコーチになりたいという気持ちが次第に強くなってきました。そんな時、先生が出版された「チームを創る」を読んだのです。私はどうしても先生に会って話を聞き、先生のチームの練習を見たいと思うようになりました。三月になれば受験も終わって暇になります。もしご迷惑でなければ長崎まで行きたいのですが...」

私は彼の手紙を読みながら19年前の自分を思い出していた。その年の正月、私は東京に全日本総合選手権大会を見に行った。全日本総合選手権というのはその年度の日本一強いチームを決める大会で、毎年代々木第二体育館で行われる。この年は私の学生生活最後の年で、4月からはいよいよ教師になり、どこかのチームの指導をする。その前に、バスケット選手なら誰でもあこがれる代々木第二体育館で日本一を争う試合を是非見ておきたかったのである。

まる1週間、朝から晩まで私は代々木第二体育館の中にいた。試合を見て研究するだけではない。試合の合間の練習も、審判員も、役員の人々の動きも、目に見えるものはすべてまぶたに焼き付けておこうと思って見た。それまで新聞や雑誌でしか見たことのない有名選手が目の前でプレーしている。国際審判員はさすがにうまい。はじめて味わう華やかでピリッとした緊張感に私は酔いしれた。半年間アルバイトをして溜めたお金はすっからかんになった。そのかわりに「よし、俺のチームもここへ連れてきて試合が出来るように強くするぞ」という夢と希望を胸一杯に詰め込んで帰った。

平井君は今、高校3年生だとすれば、私が全日本選手権を見に行った年に生まれたことになる。ふしぎな巡りあわせだ。私は3月の練習日程を同封し、さっそく手紙を書いた。「いつでもいらっしやい」。どんな少年だろう？きっと目が美しく澄んで、口元がキリッと引き締まった少年に違いない。

毎年9月中旬に体育祭が催される。得点争いには関係ないがクラブ対抗リレーはいつも会場を湧かせる。毎年トップでテープを切るのは大体バスケット部と相場が決まっていたが昨年度は少し様子が違っていた。4月に新しい先生が来て陸上部がメキメキ力をつけてきたのである。「今年は陸上部かな?」「いやいや、やっぱりバスケット部だろう」と、ダービーなみの前人気だ。だが、蓋をあけてみるとバスケット部の圧勝に終わった。陸上部はスタートから出遅れ、第二走者第三走者とバトンタッチするごとに差をつけられ、最終ランナーではとうとう10分の差をつけられてしまったのである。

その日、バスケット部は体育館が使えないのでグラウンドでインターバルトレーニングをすることになっていた。後片付けが終わってトレーニングを始めようとする、「先生、陸上部も一緒をお願いします」と、その若い先生が申し出てきた。「ああいいよ」と私は言い、バスケット部は陸上部と一緒に走るようになったが彼のこめかみは怒りでピクピク動いている。

ひと通りトレーニングが終わったが、にわか仕込みの陸上部にはかなりハードなトレーニングだったらしく、陸上部の選手はヒイヒイ言っている。そんな選手の苦しそうな表情には目もくれず、「陸上部はまだ終わっていない!」と彼がどなった。それから延々とダッシュの練習が続いた。

私が体育教官室に戻ってシャワーを浴び終わったところへ彼が帰ってきた。「がんばったね」と私が言う。「なさけない」と彼は吐き捨てるように言った。まだ腹立たしさの余韻が残っているらしい。私は彼の表情を見て見ぬふりしながら「陸上部の生徒たちは幸せものだ」と、しみじみ思った。彼の態度から生徒を思う心の奥深さを感じたからである。指導方法としての善悪はともあれ、しごきは生徒の可能性の追求であり、彼の怒りは自分自身に対してのものである。「たかが体育祭で...」と言われるかもしれない。しかし、たかが体育祭で負けたことでこれほど怒りをあらわにできるのがすばらしい。怒りは進歩の原動力なのである。

単にそれだけのことなら私も心を打たれなかったかもしれないが、彼は1年契約の非常勤講師なのである。半年後にはもうこの選手たちとは縁が切れるとはっきりわかった上で自分の手がけた選手にこれほどまでにムキになれる。そこがすばらしい。「陸上部の選手は幸せものだ」と私は思った。

彼は昨年秋の教員採用試験に合格し、この4月から県内のある高校で教鞭を取ることになった。彼の指導を受けながら、真っ黒に日焼けして練習に励むその高校の生徒のはつらつとした顔が目につく。生徒にとって何よりも幸せなのは、自分たちのために一生懸命になってくれる先生に指導をしてもらえることである。

## 監督一代 < チームプレー > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 04 / 17 (水)

昨年の全国高校総体でキャプテンを務めた鶴鳴女子高校の西上選手は1試合平均22.3ポイントの得点を挙げた。個人の成績としては全国ランキング2位というすばらしい記録である。しかし、チームは4回戦で負け、ベスト8に勝ち残れなかった。なぜそんなにすばらしい選手がいながらもっとよい成績があげられなかったかという、西上はポイントゲッターではなかったからである。

鶴鳴のポイントゲッターには平尾と馬場を仕立てた。この二人を中心に得点を取るようには私は攻撃システムを組み立てた。ところが、全国大会ともなると相手はこちらの思い通りには点を取らせてはくれない。そこで西上が強引な個人技で点を取るというパターンになる。ポイントゲッター以外の選手が活躍するというのは、意図した攻撃ができないという証拠であり、そんな試合はせいぜい善戦止まりの試合しかできないのである。

それでは初めから西上をポイントゲッターにしてプレイを組み立てればよかったかということそうではない。他の選手のボール運びでは西上までボールが回らないいうちにつぶされてしまう。また、西上の個人技を中心に勝負をしても150cmしかない小柄な身体では40分フル稼働はできない。このように、チームプレーを創るときはシステムプレーと選手の自由意志による個人技の兼ね合いが実にむずかしく、毎年のこの問題で私は頭を悩ます。

しかしここ数年は、徹底したシステム中心主義で通している。だからポイントゲッターには得意な型のプレーを創ってやり、それを繰り返し繰り返し練習させる。それでもどうしてもうまくいかない場合があるから、そういう事態に備えて西上のような負けん気が強く能力のある選手は型にはめないで自由にさせておくのである。私がそういうチーム創りをするからであろうか、他のチームの試合を見ていると際だつ目立つ選手が華々しい活躍をする試合や個人個人が自由にプレーする試合は途中で飽きてしまって最後まで見る気がしない。

## 監督一代 < ベティ > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 04 / 24 (水)

この3月で指導者生活19年が過ぎた。この間、全国大会で優勝もした。全日本チームで活躍する選手も数人育てた。しかし、私にとってもっとも大切なものは、このような栄光の数々ではなく、一年目の選手たちとともに毎日汗みどろになって練習した日々のできごとである。

私が最初に勤めたのは、長崎市内の中心にある桜馬場中学校であった。私が赴任したとき、ここのバスケット部は他のどのチームと対戦しても勝てるという保証はゼロに近いほどレベルが低かった。その選手たちを前に私は宣言した。「俺は、このチームを九州大会で優勝できるほど強いチームにするためにこれから毎日指導する」ずいぶん生意気なことを言ったが私は本気だった。そのことをハダで感じたのか選手たちもよくがんばって私の練習についてきた。

ある日こんなことがあった。ベティ(山下登紀子)が何度教えられても同じ失敗を繰り返す。たまりかねた私はいきなりベティの頬に平手打ちをくらわせ、「このバカヤロー、何度同じことを言わせる気だ」とどなった。ベティは口をへの字に曲げ、しばらく私をにらみすえていたが、次の瞬間ワッと大声で泣き叫びながら私の顔面に力いっぱいボールを投げつけた。

あとで聞いたことだが、いくら一生懸命やっても私が認めてくれないので、くやしくてたまらなかったという。以来19年、私にはむかう選手はひとりも出ない。当時の私たちは、このように監督と選手がケンカになるくらい必死で取り組んだ。今の選手がだらしがないというのではない。今も昔も変わりなく、選手はよくがんばってくれる。だからこそ数々の栄光も勝ち得た。だが、これらの栄光のすべてが、1年目の選手たちとともに毎日汗を流した土台の上に築かれているのである。

伝統が築かれてから栄光を勝ち得るために流した汗や涙には少々濁りのあるものもある。しかし、ベティたちとともに無から出発して土台を築いていった日々の汗や涙には一点の濁りもない。何年指導経験を重ねても、どれほど栄光を勝ち得ても、苦しいことや辛いことが何度もある。そんな時、私はいつも自分に言い聞かせる。「ベティたちの時の苦勞に比べれば今の苦勞なんか軽いものだ。環境に恵まれ、栄光を得て気持ちが悪くなり、お前はあの頃の純粋さを忘れていないのか？」

## 監督一代 < 離島 > 山崎 純男

朝日新聞 1985 / 05 / 01 (水)

対馬に行ってきた。私はスポーツ関係の組織に頼まれて指導のために時々地方に出かける。対馬はこれが3回目だ。二日目、先輩の松村氏に案内してもらって上対馬を回った。佐須奈、日田勝、豊と、対馬北部の町を周り、途中の小高い丘の上でクルマを止め、「ほら見えるかな」と松村氏が言った。彼の指さす海の彼方に目をこらすとぼんやり朝鮮半島の陰が見える。ここは国境の町なのだ。

目指すところは豊中学校であった。ここは、私のかつてのライバルで、また私がかつても尊敬する指導者の一人である米沢先生が昨年まで4年間つとめていた学校である。公立学校の教師は広域人事交流で、市内、郡部、離島の3ヶ所を回って定められた年数務めなければならない。米沢先生も、この人事交流で佐世保市内の学校から対馬へ転勤になったのである。豊の町は、対馬の最北端の入り江の奥の狭い土地にへばりつくように人家が集まった小さな町だった。学校には体育館はなかった。中庭と見間違えるほどの小さなグラウンドにバスケットのスタンドが立っていた。3年ほど前に米沢先生からもらった手紙にこう書いてあった。「ようやく対馬では優勝できるチームになりました。なにしろ女子生徒が9人しかいない学校ですからぜひたくは言えません。でも一人だけ素質のある選手がいます。時間が取れば見に来てください」

女子のバスケット部員が9人しかいないのではない。1年生から3年生までの女子生徒全員が9人なのである。私はその手紙を思い出しながらしばらくそのグラウンドにたたずんでいた。私は8年目に公立学校の教員を辞め、鶴鳴高校に移籍した。当時、私にも離島か郡部勤務の時期が迫っていた。それがいやで公立学校を辞めたのである。私立には転勤がない。体育館のない学校に転勤させられることもなく、私は現在も恵まれた環境の中で思い切りバスケットの指導をさせてもらっている。

そんな私に比べ、米沢先生はこの小さな国境の町でわずか9人の生徒たちのために4年間も指導を続けたのである。手紙の中に一言でもグチらしいことばがあれば私もいくらか救われたのだがそのかけらもない。私は豊中学校のグラウンドにたたずんだまま言いようのない感動を覚えると同時に「また米沢先生に負けた」と思った。

新入生が入部してきた。彼女たちを見ていると実に楽しい。彼女たちの一人ひとりについて、毎日何か新しいことを発見できるからである。まったく無名だったのにすばらしいスピードを持っている選手がいる。中学時代はかなり活躍した選手なのに意外に柔軟性がなくて将来に不安を感じる選手もいる。意外な欠点を発見した時は残念でもあるが、そんなことも含めて彼女たちが上級生になった時の青写真をあれこれ描いてみるのは実に楽しいものだ。

今年の新入生の中には小柄だがスピードのある選手がふたりいる。森保選手と清水選手だ。どちらも甲乙付けがたく、最近好素材に恵まれなかった我がチームとしては楽しみな選手である。先日、1対1の練習で森保選手に上級生の小島選手が2回続けてやられる場面があった。3度目の勝負、さてどうなるかと思って成り行きを見ていると小島選手は消極的になり、腰を引いて身構えている。

「ちょっと待て！なんだその構えは！俺はそんなぶざまな格好をするくらいなら死んだ方がましだぞ！おい！俺たちが1年かかってやってきたことはそんなものだったのか？」私は怒りで声を震わせながら小島選手をどなりつけた。いくら真面目に努力を続けても結局身体的能力の優れた選手にはなかなか勝てないものだというのを、長い指導者生活の中で私は知った。森保選手も身体的能力が優れている。だから、いずれ上級生のだれかが近い将来レギュラーの座を奪われるだろう。それは私にとっては嬉しいことである。

だが、久々の有望新人を獲得できたからと言って手放しで喜べない一面もある。なぜなら、我々は誰よりも自分に対して厳しく、真剣に練習に取り組んでいると自負している。だから、そんな練習を1年間も続けた者が、新入生の素質がいくらすばらしいからといって簡単に追い抜かれてもらいたくないのである。

小島選手も昨年入部した時に比べて見違えるほど上達した。しかも今は我がチームのエースである。「私とあなたは苦労した年月が違う。だからそう簡単にはやられないよ」そんな気概を持って臨んで欲しいのである。そんなプライドまでなくしてしまったら、苦労してきた1年間があまりにも虚しすぎるではないか。

春から夏にかけて、中学や高校の部活動はがぜん活気を帯びてくる。夏休みに行われる九州大会や全国大会の予選大会がひしめきあってくるからである。ひと昔前に比べて近頃の試合はずいぶん変わった。選手の体位が向上したので試合内容に迫力がある。技術も比べものにならないくらいレベルアップした。変わったことでもっとも目に付くのが選手の身につけるものがぜいたくになったということである。

中学生が履いている靴には我々さえ買うのをためらうような高価なものがずいぶん多い。いやむしろ、友達と競い合って高価なものを買い求めている気さえする。これは数年前から思っていたことだが、選手のぜいたくな身づくろいを見ていると、中高校生のスポーツ活動が本来の姿から少しずつ遠ざかっていく気がしてならない。

元来、スポーツというのはハングリー精神でやるものだとは私は思っている。「有名になりたい」「強くなりたい」「はやくレギュラーになってユニフォームを着たい」このような願望を満たそうとがんばるのがスポーツである。ところが昨今、そのような願望は簡単に満たされる。あまり強くなくても遠征に行きたいと言えば保護者や後援会が動いてサッとお金が集まる。クツが欲しいと言えばすぐ買って貰える。試合会場では保護者有志の心のこもった昼食やジュースの差し入れ等、至れり尽くせりのサービスをしてもらえる。

おぜんたてが揃いすぎている。こどもたちは自然に、それが当たり前だと思ってしまう。そうすると、ハングリー精神はなくなり、強くてたくましい選手は育ってこない。青少年の家庭内暴力や校内暴力が大きな社会問題になっている今、スポーツ活動の価値ちは高い。スポーツには、自己を追求する厳しさがあ、自分の願望を満たすための強い意志と努力が要求されるからである。

おとなたちの甘やかしがもとで、自己を制御することができないこどもたちが増えた現代社会において、スポーツにまでおとなの甘やかしが入り込んできてはもはやこどもたちの心を育てる場所はない。我々はこどもたちにもっと苦しい思いをさせ、辛い思いや寂しい思いを経験させなければならぬと思う。もちろん、その根底には何物にも代え難いこどもたちへの強い愛情をもってのことであるが...